

発行

NPO法人ブルーシー阿蘇  
宮津市須津 797  
Tel.0772-46-4943

# ブルーシー通信

第1号

2007年7月30日発行

## 生ごみ堆肥で花いっぱいのに !!

### 夏の彩りは朝顔で

ヘブンリーブルーという朝顔（オランダ産）の苗を種から育て、約20ヶ所に320株ほどを配り、生ごみ堆肥で育てる実験を行なっています。初めてのことはとはいえ、栄養分が多いと苗は育てにくいこと、朝顔の成長には苗の良し悪し、土の影響が大きいこと、どんどん上へ伸び上の方が繁茂しやすいことなど、一喜一憂しながらいろいろ勉強させてもらっています。そして早く宮津の町を朝顔でいっぱいにするのを願っています。皆さんもあちこちにある朝顔を探して、気分的にも涼しい夏をお過ごし下さい。



ほくとしんきん大宮支店



橋立大丸



ぶらりんぐセンター

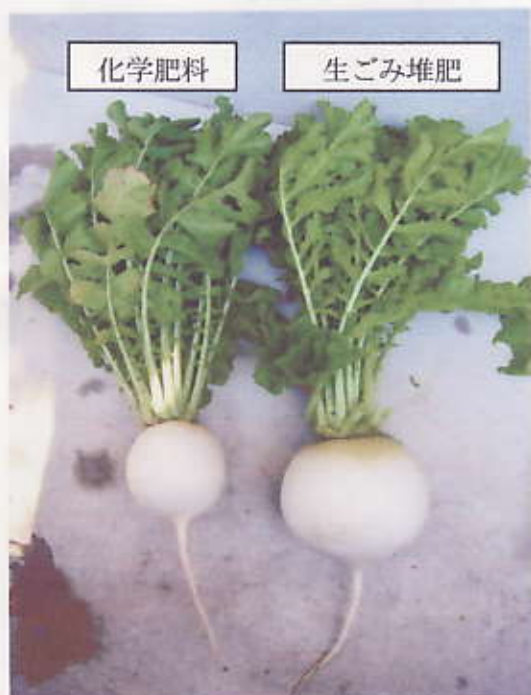
### なぜ生ごみ堆肥なの？

いま日本では生ごみのほとんどが焼却されています。しかし先進国では脱焼却が進んでいて、先進13ヶ国にある焼却炉の7割以上は日本に集中しています。焼却は生ごみをもつ高栄養分を灰にしてしまうだけでなく、ダイオキシン、重金属を発生させ温暖化対策上も好ましくありません。生ごみを堆肥にすれば可燃ごみのほとんどはリサイクル可能になり、宮津市の生ごみ処理費1.2億円/年の軽減にも協力できます。我々が進める宮津方式ではゼオライトを使用します。ゼオライトは堆肥づくりに最適の粘土だからで、このゼオライトを阿蘇海のへどろから合成すれば、2,500トン/年のへどろの除去が可能となり、阿蘇海の浄化を進めることもできます。宮津方式の普及にご協力下さい。

## “地産地消”で明るく健康に

「三里以内の食べ物で病知らず」という言葉があります。仏教の教え“身土不二”に通じるもので、我々人間もその地域自然の一部であり、地元の食材を食べて自然と調和して生きることの大切さを教えています。自らの生ごみ堆肥で安心して健康な野菜づくりをしませんか。写真は化学肥料と生ごみ堆肥で丸大根を育てたときの成長を比較したものです。生ごみ堆肥の効果は期待以上によいものでした。一般に堆肥の即効性は小さいですが、畑に入れ続けると腐植というものが地力を増強し、肥効も年々増して農薬と無縁な元気な野菜を育ててくれるようになります。

日本はいま食料の6割を海外から輸入し、この輸送だけでも大量の温暖化ガスを発生しています。フードマイレージ（輸入量と輸送距離を掛け合わせたもの）という指標によると、日本人一人当たりのそれは約4,000トン・キロメートル、輸送距離は10,000キロメートル（東京～シカゴ間）になるといいます。地球環境のことを考えると、地元で育てた野菜を地元で消費する地産地消の考え方が、今後ますます大切になってきます。



## “汗”をかきましょう

人間が生きるのに木の実を集めていた太古の昔、人間は採取に必要なエネルギー量の約4倍の食料エネルギー（太陽エネルギー）を得ていました。1人が働くことで1家4人から5人が養えたわけです。人力で土を耕し作物をつくるようになると、耕作に必要なエネルギー量の約12倍の食料エネルギーが得られるようになり、このゆとりが人間社会に分業化をもたらしたといえます。では機械化の進んだ現在はどうか。機械化で収量は飛躍的に増えました。しかし燃料、化学肥料、農薬などに使うエネルギー量も飛躍的に増え、得られる食料エネルギーは1倍以下、つまり米1kgを食べるとき石油も1kg強を食べる結果になっています。ハウス野菜は使用エネルギー量が更に多いため、得られるエネルギー量は1/3以下とか。効率(?)を追い求めた結果、極めて非効率な結果を招いています。生ごみ堆肥でよい汗をかきながら、化学肥料、農薬と無縁な食材づくりをすることは、効率的で地球環境にも優しいことなのです。（松尾嘉郎；地球環境を土からみると）

## 堆肥化ワンポイント

生ごみ堆肥化で厄介な問題にウジ虫の発生があります。“ウジが湧く”という言葉どおりまさに湧くように発生し、どの生ごみ処理法もこの虫対策に苦慮しています。しかし処理する土に濡れたところがなければ、虫は絶対に発生しません。濡れたところをつくらないことが最大のポイントといえます。生ごみの水切りをよくする、高水分のもの（スイカの皮、魚のわたなど）を大量に入れない、土の攪拌をよくして濡れたかたまり、箇所をつくらない、などが重要です。特に処理箱の下部、隅は湿気やすいので、そうしたところの対処が大切といえます。宮津方式では日に2回、箱を反転、攪拌しますが、これは主にこの虫対策のためであり、優れた方法であると確信しています。